様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０２９６

研究課題名（和文）１９世紀英文学とジャーナリズムに見られるイーストエンド像の歴史的・文化的研究

研究課題名（英文）Historical and Cultural Studies on the Representation of the East End in Nineteenth-Century English Literature and Journalism

研究代表者
田中　孝信（TANAKA, Takanobu）

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：２０１７１７７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀後半から20世紀初頭のロンドンで貧困と犯罪の温床として中・上流階級の関心を引いたイーストエンドが、19世紀全般にわたって文学やジャーナリズムでどのように表象されていたかを、中心世界の眼差しが帯びる両面価値性の観点から分析することで明らかにすることを目的とした。様々なタブーの境界侵犯の可能性を探った結果、この地区に対して憐れみや恐怖のみならず、抑圧された自己の共鳴が見られることが判明した。イーストエンドが持つ「嫌悪の魅力」は、特定の価値コードのもとに一元化されていた現実に本来の多元性を回復させ中心世界の人々に生きているという感情を蘇らせると同時に、彼らの秘めたる欲求をも暴くのである。

研究成果の概要（英文）：The East End highly attracted not only social reformers and religious figures but also novelists and journalists as "Darkest London," a hotbed of poverty and crime, from the late 19th to early 20th centuries. The purpose of this research is to analyze the representation of this area in English literature and journalism through the 19th century as a whole, from the perspective of the middle and upper classes' ambivalent views. By exploring the possibilities of transgressing the boundaries of various taboos, it has been proved that the attitudes of the middle and upper classes to the area included their oppressed selves' sympathy with pollution as well as pity and fear. The "attraction of repulsion" pervading the East End caused the reality unified by a particular code of values to recover its original plurality, and brought about the effect of reviving the emotions of living to members of the central world. But, at the same time, it disclosed their hidden desires.

研究分野：人文学

キーワード：19世紀英文学　ジャーナリズム　ロンドン　イーストエンド　慈善活動　女同士の絆　浮浪児　異人種混淆

１．研究開始当初の背景

(1)　2012 年のオリンピックのメイン・エリアとなったイーストエンドは、ロンドンで最も活気に溢れる、「ロンドンの今」が輝いている地域である。しかし歴史を紐解けば、そこは長きにわたって、グローバル経済の中心として発展するシティの負の面を担ってきた。特に 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、ドックと倉庫から成るその地区は都市の貧困の象徴となった。ジャーナリストや社会改良家たちは、貧困の実態を調査しその撲滅に取り組もうとする。中・上流階級の罪悪感は、彼らをトインビー記念館や民衆の館の建設といった慈善活動へと駆り立てる。同時に、マッチ女工のストライキ（1888)、「切り裂きジャック」事件（1888)、ロンドン・ドック・ストライキ（1889）は下層階級への恐怖心を、第二次・第三次選挙法の改正は一人一票の民主主義への不安感を体制側の人々に引き起こす。ディズレイリが富める者と貧しき者と表現した分断が、富裕なウエストエンドと貧困のイーストエンドの対立となって表面化するのである。

(2)　このようなイーストエンドと中心世界との係わり合いやその空間が中・上流階級にとって持つ意味について、これまで歴史学や社会学の領域で論じられるのが常であり、文学研究ではほとんど取り上げられることはなかった。その理由としては、1840-50 年代の社会問題小説がディケンズ、ギャスケル、ディズレイリなどの主要作家によって書かれたのに対して、「スラム・フィクション」が現在ではあまり顧みられないベザント、ハークネス、モリソンなどによって書かれた大衆作品として過小評価されていることが挙げられる。しかし、主要作家も、たとえイーストエンドが作品全体の舞台となるわけではないにせよ、物語展開や主人公の人間性に重大な影響を及ぼす空間として描き込んでいる。その傾向は世紀末につれてますます強まる。にもかかわらず、国内の英文学研究ではイーストエンドを全面的に取り上げたものは皆無と言っても過言ではない。

(3)　研究代表者は、長年のディケンズ研究において、彼が晩年になるにつれて、小説はもちろん雑誌記事においても、イーストエンドに言及する頻度が増えてくることに興味を抱いた。それを起点に 19 世紀英文学を見渡してみると、すでにイーガンが『ロンドンの生活』（1821）で、略奪と暴力殺人で有名なラトクリフ・ハイウェイをピクチャレスクに描き出していることが明らかになる。その流れがディケンズを経て、80-90 年代の恐慌の中、多くのリアリスト作家たちへと引き継がれていくのである。その過程でイーストエンドへの眼差しにどういう変化が見られたのか、それはジャーナリズムや他の言説とどう係わり合っているのだろうか。それらの疑問を後押しした研究は、ボーア戦争時にイーストエンドから多くの労働者が志願し、陸軍兵卒として南アフリカの前線へと赴いたとき、彼らは本国では、道徳的に堕落し肉体的に退化したフーリガンとして忌み嫌われていたにもかかわらず、対外戦争においてはアングロサクソン民族の男らしさの象徴たる「トミー・アトキンズ」として賞賛されたことを新聞記事・広告から明らかにした拙論「新聞広告とボーア戦争」（2009）だった。

(4)　そうした研究と並行して研究代表者は、「19 世紀英国の文学と大衆ジャーナリズムにおける移民文化受容と英国性の変容」〔平成 22～24 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）〕において外から内への「移民」という形での人種的他者と彼らの文化がどのように表象されているかを英国性との係わりから探る機会に恵まれた。その際重要となった空間上の定点の一つがイーストエンドだった。

(5)　また、平成 22～24 年度にかけて「19 世紀後半から 20 世紀初頭のロンドンのスラム街小説―闇の奥イースト・エンドの人々と生活」全 14 巻の監修を委嘱され、その過程で文学テクストの読みを通して、中・上流階級の労働者階級や貧民に対する眼差しの重層性を読み取ることができ、前者の心的態度の根幹に位置するものは何か、という問題意識を持つに至った。

２．研究の目的

(1)　本研究は、研究代表者が上述の「移民文化受容と英国性の変容」で実施してきた研究の一部を活用し、イーストエンドそれ自体に焦点を当てる。したがって、第一に重要な目的は、イーストエンドの表象を文学のみならず新聞・雑誌にも求めることである。両者が競合・協力の中、周縁に追いやられた労働者階級や貧民をどのように表象し、読者にどのような影響を与えたかを明らかにする。

(2)　次に本研究で重要となるのが、中・上流階級の多くの男女がイーストエンドで行った慈善活動の背後に潜む抑圧された欲求を探ることである。スラミングに端を発したその地区への関心の高まりは、セツルメント活動や宗教活動を活発化させるが、彼らを惹きつけたのは、はたして博愛精神や罪の意識だけだったのだろうか。そうした疑問のもとで様々なテクストに当たるとき、その地区への眼差しに、労働者階級や貧民への恐怖心と同時に、アイデンティティや文化の境界の流動化を引き起こす要素が見えてくる可能性がある。

(3)　本研究の特色と独自性は、19 世紀イーストエンドとその住民に対する中心世界の姿勢を、通時的に文学とジャーナリズムとの

係わりの中で捉え論じようとする点にある。文学の分野ではこれまでイーストエンドについて、ジャーナリズムとの係わりで論じたものはもちろん、系統だった研究そのものが皆無に等しい。確かにキーティング「イーストエンドにおける事実とフィクション」（1973）といった優れた論文もあるが、中心世界の眼差しの曖昧性にまで突っ込んだ議論はなされておらず、また、ジェンダーや人種の観点からは具体的に言及されず、文学・文化史研究としての成果は限定的なものに留まっている。19 世紀の文学や新聞・雑誌資料に裏付けられた本研究はこれまでに類例を見ないものであり、文学史及びジャーナリズム史とその背景となる文化について、従来とは異なる知見を得ることが期待できる。

３．研究の方法

(1)　19 世紀イギリスの文学とジャーナリズムの相関関係の中でイーストエンド像を歴史的・文化的観点から考察するという研究目的達成のために、研究代表者は、本研究に係わる過去の業績である学術論文・著書を始めとし、前述の科学研究費補助金による研究成果を踏まえ、発展的内容となるように努めた。

(2)　研究対象範囲を、帝国主義の発展による植民地からの移民の流入と大不況下での失業者の増大に喘いだ 80-90 年代と、その時期に至るまでの 19 世紀前期・中期と労働者の政治的力が増していく 20 世紀初頭、の二つの時期に分けることにした。

(3)　文学と新聞・雑誌におけるイーストエンドの表象を、住民や彼らの文化に対するそれらの言説の共通性と相違性に着目しながら探る一種の文化史研究なので、資料収集と資料の分析、という二つの作業が中心となった。

(4)　大枠としては、まず対象となる時代の主要な出来事とそれらを誘発した動きを考察範囲に含め、イーストエンドとの因果関係を押さえた。その上で、その地区と中・上流階級の係わり方を、主に遊興、スラミング、セツルメント活動、宗教活動、といった点において新聞・雑誌がどのように報道しているかを、関与者の性別にも注意を払いつつ調査した。そこから得られた知見を主要作家の作品やスラム・フィクションに描き出されたイーストエンド像と比較検討した。そうすることで、中心世界の眼差しが孕む意味とその地区の現実との乖離、及び後者が前者に対して持つ「嫌悪の魅力」の本質を明らかにしようとした。

(5)　研究実施のため、対象となる文学作品は概ね附属図書館に整備されていたが、新聞・雑誌資料については、前述の科学研究費補助金の助成による収集品を活用しつつ、新たな資料の追加や現地調査・収集を行った。第一段階として、初年度は新聞・雑誌の基礎的資料の充実を計り、『イースト・ロンドン・オブザーバー』、『イラストレイティッド・ポリス・ニューズ』（追加分）等を購入し、資料のデータ・ベース化を設計した。第二段階では、大英図書館において『ペル・メル・ガゼット』、『ロンドン・ササイアティ』など数誌を、貧民学校博物館において『夜と昼』を閲覧した。そして最終段階として、それらから得たデータを用いて、研究の取りまとめを行った。

４．研究成果

(1)　まずスラミングと慈善活動との関連性を明確にした。イーストエンドへの関心の起爆剤となったのが、1883 年に出版された 2 冊の書、すなわちシムの『貧しき人々の生き様』と、マーンズとプレストンによる『見捨てられしロンドンの悲痛な叫び』だった。良心を目覚めさせられた多くの裕福な人々が東へと向かった。その中には単に娯楽目的の者がいたのも事実である。しかし、好奇心に駆られたスラミングがきっかけとなって、イーストエンドにより深い関心を抱くようになり貧民救済のための慈善活動に従事した人々がいたことも否定できない。だが同時に、その背後に貧しい労働者への恐怖心が潜んできたことを忘れてはならない。1887 年の「血の日曜日」事件、そして 1888 年から翌年にかけて起こった、マッチ工場の女工のストライキを始めとするイーストエンド絡みの 3 つの事件は、その地区の汚れと暴力性を中・上流階級の目に鮮烈に焼き付けたのだった。社会は恐怖心ゆえにますます積極的に、西と東の対照性を縮めるために東への架け橋を構築しなければならない。自らが主導権を握って自分たちの線に沿って、労働者階級を文明化することが肝要なのである。彼らは放っておくには余りに危険な存在なのだ。

(2)　では、1880 年から 1920 年にかけての一連の社会的・文化的事象を背景に、スラム小説家たちはイーストエンドをどのように捉えていたのだろうか。最初に取り上げたのがベザントの『あらゆる種類と階級の人々―あり得ない物語』（1882：以下『人々』と略す）である。彼は、センセーショナリズムを避けるのみならず、その地区の現実の生活の赤裸々な描写をも拒否し、地名を除いて作品を一種のファンタジーとして展開する。それゆえ『人々』は、イーストエンドについて無知、もしくは労働者階級に対して恐怖と不安を覚える中産階級読者に容易に受け入れられたのだった。イデオロギーの点でも、『人々』は他のどのスラム小説よりも、階級間の危機に際して、中産階級の口に合う方法で取り組んでいる。ベザントにとってイーストエンドの問題は、単純に階級間の文化的差異、支配者側の適切な指導と関心の欠如に起因する。

実際これまで階級間の建設的な接触はなく、支配階級は労働者階級にウエストエンドの「高尚な文化」を正しく鑑賞する機会を与えてこなかった点で義務を果たしていない、と彼は信じていた。文化の向上を通して、労働者階級を清潔と中産階級的なリスペクタビリティの段階にまで引き上げることができるのである。そのために必要とされたのが、父親的温情主義と文化的植民地化の推進だったのだ。

(3)　では、リアリズムを基調とし、労働者階級や貧民の普通の生活を描き出したとされるモリソンの場合はどうなのか。確かに彼は、ベザントがイーストエンドをあくまで外から眺めているのに対して、スラムの内から描くことで、そこに住む老若男女の目を通して眺め、貧困の中で日々暮らすことが人々にどういう影響を与えるのかをペイソスを交えず、できるだけ忠実に記録したのだった。しかし、モリソンも、暴力性という形で顕在化する潜勢力を帯びる労働者や貧民に対して恐怖心を抱き、それが作品中に彼らとの間に距離を生じさせているのではないだろうか。それを『ジェイゴーの子ども』（1896）の帯びる曖昧性に探っていった。その結果として明らかになったのは、この作品の物語展開の底流を成すイデオロギーにも、社会一般に見られる、「正常な」社会とその規範から逸脱した「異常なもの」という二項対立が反映されているということだ。モリソンは、貧困の原因を貧民自身の道徳的堕落であるとするのではなく、環境決定論を唱えていたのは事実である。にもかかわらず、この作品で最も重要なイデオロギー上の目的は、原因と結果を置き換えることで、ウエストエンドの繁栄とイーストエンドの貧困との繋がりを分断することなのだ。作品が、貧困や退化が資本主義的搾取による社会的・物質的不平等によってもたらされた結果であることを示唆しているのは間違いない。主人公ディッキーの本質的な善良さがセンチメンタルに描き込まれ、読者の憐憫の情を喚起しようとする作者の意図すら読み取れる。だが、それ以上に逸脱をスペクタクルなまでに強調し、西と東の二つの領域を区別するのである。こうした姿勢の背後には、貧民が、彼らと地理的に接するリスペクタブルな労働者のみならず、自分たちをも堕落させる触媒として機能するかもしれないというモリソンの恐怖心なのである。

(4)　しかしながら、何もベザントやモリソンのように、イーストエンドの労働者や貧民に対して否定的な態度を示した作家ばかりではない。中産階級の独身女性ハークネスの三部作『都会の少女』(1887)、『失業中』(1888)、『ローブ大尉』（1889）の分析から見えてくるのは、彼女が貧困と階級闘争の問題をジェンダーの問題としも捉え、最も犠牲となりやすい労働者階級の女性に目を向け、階級を越えた女性同士の連帯の可能性を、様々な形の母子関係を通して追求したということだ。そして、利己的な男性中心社会に欠けているもの、すなわち母性を根幹とする人間愛による問題解決への共感を訴えたのである。

(5)　バークが『ライムハウスの夜』（1916）で描くイーストエンドも、肯定的価値を付与された空間である。コスモポリタン化した様相を中国人男性と白人女性との性的関係から捉えた結果見えてきたのは、人種差別意識や東西の対立といった二元論的な区分にばかり囚われない彼の新たな視点だ。作品は、読者が「異質なもの」と思っているものが実は自分たちと本質的に変わらない存在であることに気づかせる。イーストエンドの、中心世界のイデオロギーに囚われない徹底した再解釈を要求していることが読み取れる。

(6)　バークの小説に見られたような、読者を惹きつける「嫌悪の魅力」は、現実の慈善活動の動因にもなっていたのではないだろうか。その疑問から中・上流階級の淑女たちがイーストエンドで行った慈善活動に焦点を当て、「家庭の天使」としての役割を押し広げた形でのそうした活動に彼女たちを駆り立てた原因を探った。一義的には憐れみや罪の意識が考えられるが、それだけではなく、そこには、既成の階級やジェンダー観を脅かす無秩序な欲求が蠢いていたのである。社会改革者ポッター、及びハークネスの『ローブ大尉』やミードの『貧民街の王女』（1895）といった作品中の独身女性たちの活動を詳細に検討した結果、彼女たちは慈善活動への従事を通して、男性支配からの解放と自己確立を成し遂げようとしていたということが分かった。さらにそれは、同階級のみならず下層階級の女性たちとの新たな関係の構築にも繋がる。男性を排除した、ホモエロティックなまでの女だけの世界を築き上げてゆくのである。淑女たちがイーストエンドという混沌と汚穢の中に身を埋める行為は、彼女たちに家父長制イデオロギーが規定するステレオタイプ的なものの味方の限界を認識させる。私たちは、無秩序が現存の秩序を破壊することは認めながらも、それが潜在的想像力を持っていることを知っている。無秩序は危険と能力の両者を象徴しているのである。スラム街での体験によって彼女たちは、男性のお仕着せではない新たな自分を発見し、社会との関係を再構築する機会を得るのである。

(7)　ディケンズの『荒涼館』（1852-53）の道路掃き少年ジョーのようなロンドンの浮浪児に対する中・上流階級の心的態度にも、憐れみと恐怖心以外の心的態度が見られたのではないだろうか。その問いを解明するために貧しい子ども像を様々なテクストや写

真や絵画に探った上で、その範疇に収まらない眼差しを、世紀末イーストエンドでセツルメント活動に従事するエリート男性たちとその地区の少年たちとの係わりの中に見ていった。結果として言えるのは、中心世界は子どもたちを「異質なもの」として眺めていたということだ。それは、現実を必ずしも直視しない、利己主義と利他主義が綯い交ぜになった勝手な捉え方と言える。エリート男性が少年たちとの間に求めた友愛生活の裏面には利己的な性的感情すら読み取れる。要するに子どもたちに対する眼差しには、見る側の願望や欲求が投影されるのであって、それが子どもを貧困や無知から救済するという効果をもたらしたのは事実だとしても、一方で、無償と見えても、無私を装うものほど自己愛の満足に過ぎないという疑念は拭えない。利他主義に基づく博愛行為の背後には、程度の差こそあれ、利己主義に根差した偽善が蠢いているのである。

(8)　要するに、イーストエンドの表象を分析する作業から見えてくるのは、中心世界に属する人々自身が「異質なもの」を含んでいるということだ。その地区へと人々がフィクションや慈善活動を通して惹きつけられるのは、その地区が、社会の急激な変化の中で断片化する彼ら自身を、彼らが意識するにせよしないにせよ、映し出しているからなのである。単純な二項対立を中心に形成される価値観は否定され、人々は自らのアイデンティティを見つめ直し、アイデンティティとは何か、そもそもアイデンティティなどというものが存在するのか、を問うことを迫られるのである。

(9)　本研究が、国内外の英文学研究でほとんど顧みられることのなかったスラム小説を再評価した点、及びフィクションとジャーナリズムの相関関係の分析を通して、中心世界にとってイーストエンドへの関心が単なる憐れみや恐怖だけでなく、抑圧的な社会規範から解放願望や、タブーとされるもの、すなわち人間の本質的な欲求に根差していることを明らかにした意義は大きい。

(10)　研究代表者は研究成果をディケンズ・フェロウシップ日本支部や大阪市立大学英文学会のシンポジウムで発表し、加筆修正の上、雑誌論文や図書の形で出版した。今後はそれらの成果を踏まえて単行本として出版する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①田中孝信、「博愛か偽善か？―19 世紀ロンドンの貧しい子どもたちの表象」、『人文研究』、査読有、Vol.66、2015、pp.105-26
http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/infolib/user_contents/kiyo/DBd0660007.pdf

②田中孝信、「世紀末イースト・エンドにおける慈善活動に駆り立てられる淑女たち」、『人文研究』、査読有、Vol.65、2014、pp.81-96
http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/infolib/user_contents/kiyo/DBd0650006.pdf

〔学会発表〕（計２件）

①田中孝信、「スラム小説に見る性の政治学―マーガレット・ハークネスとイーストエンド」、大阪市立大学英文学会、2015 年 12 月 6 日、大阪市立大学（大阪府大阪市）

②田中孝信、「博愛か偽善か？―19 世紀ロンドンの貧しい子どもたちの表象」、ディケンズ・フェロウシップ日本支部、2013 年 10 月 19 日、西南学院大学（福岡県福岡市）

〔図書〕（計４件）

①田中孝信、大阪教育図書、「スラム小説に見る性の政治学―マーガレット・ハークネスとイーストエンド」（『文藝禮讃―イデアとロゴス』）、2016、pp.749-60

②武井暁子・要田圭治・田中孝信（編著）、音羽書房鶴見書店、『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』、2013、288

③田中孝信、音羽書房鶴見書店、「放浪者への眼差し―その秘められた欲求」（『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』）、2013、pp.215-55

④Takanobu Tanaka, Osaka Kyoiku Tosho, “An Ambivalent View of Vagrants in Late Nineteenth- and Early Twentieth-Century Britain”(*Dickens in Japan: Bicentenary Essays*), 2013, pp.205-20

６．研究組織

(1)研究代表者
田中　孝信（TANAKA, Takanobu）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：２０１７１７７０

(2)研究分担者
なし